

「農家の部」 日本農業新聞会長賞
徳原 一彦 氏 (山口県山口市)

1. 経営者及び経営内容

徳原氏は農業に従事する前は会社員をしていたが、26歳で農業を志し、専業農家であった父親から技術を学び始めた。5年程父親から技術を学んだ後、経営移譲により、実質的に農業経営者となった。

山口市北部の中山間地において高齢化等により営農を継続できなくなった、中小規模、排水不良等で借り手のつかない条件不利地を含む水田約30haを作付けし、地域の耕作放棄地発生防止の一翼を担う等、地域への貢献度が高い。

経営品目は水稻＋小麦を基本とし、2人の通年雇用を行っており、また、農閑期も効率的な経営を行えるよう、野菜栽培にも取り組んでいる。小麦については全量を県が推奨する「せときらら」を栽培しているが、水稻や野菜については様々な品種・品目を栽培し作期分散を行うことで、先進的な複合経営を実践し、農地の有効利用と経営収支の向上に努めている。

2. 技術上の特色

小麦の栽培ほ場は全体的に排水不良が著しい条件不利地であるが、排水対策の重要性を早くから意識し、全ほ場に明きよを設置するとともに、県の推奨に比べてもかなりの高畝で栽培することで排水対策を徹底している。特に、水稻の裏作として麦を作付けするほ場は水稻収穫後、早い段階で額縁明きよを施工して、表面排水を促進しほ場の早期乾燥に努めている。

播種時には出芽不良を防ぐために、各ほ場の特徴を見極めながら播種深度に細心の注意を払いながらの丁寧な播種作業を実施しており、均一的な作業を行っている他栽培組織では極端な出芽不良が頻繁に発生する中、徳原氏のほ場では発芽不良は全く発生が見られない。

中国四国地域では特に多くみられるように、徳原氏のほ場についても中小規模のほ場が多く、また広く分散しており、作業的に非効率なほ場が多い。そのような条件の中、定期的にはほ場の状態を確認しながら、播種等の適切な作業時期を見極め、効果的・効率的な栽培に努めている。

播種後には全ほ場に糸を張り鳥害対策を実施することにより、周辺地域で発生しているような鳥による食害は発生していない。

県が推奨している実肥を行うことで品質の向上につながる一方、雑草の成長を促進するため、対策が課題となっている。雑草対策については、播種直後の土壌処理剤だけでなく、発生状況により年明けに中期除草剤を活用することで徹底を図っている。

生産コスト低減については、播種と併せた施肥、除草剤散布や石灰資材を混合した堆肥散布を行うこと等で作業の効率化を図っている。また、中古機械の購入や頻繁に自ら農業機械のメンテナンスを行うことで、農業機械費の削減、長寿命化により農機具費の削減を実現している。

徳原氏の技術は特別な機械設備や特殊技術等は必要なく、地域の技術指導や情報提供にも積極的に努めている。徳原氏の栽培法を参考に栽培した他の地域では収量増を実現しており、地域の技術力向上に貢献している。

3. 収量の向上、品質改善

赤かび病防除を基幹防除として、適期に地域の小麦ほ場を一斉防除することで赤かび病の発生を最小限に抑えている。防除後もほ場での赤かび病の発生状況に注意を払い、追加防除の必要か否かの把握を行っている。防除は乗用管理機を使

用し労働力の軽減も図っている。

山口市北部は排水不良が著しい中山間地域にあり、地域の他の11組織の平均単収144kg/10aに対して、徳原氏はその2倍以上の平均単収316kg/10aを挙げており、地域の手本となっている。

「せときらら」のパン用としての加工適性を発揮するため、子実タンパク質含有量向上のための開花期追肥を施用した。基準値11.5～14.0%にわずかに届かなかったが(H28年産:11.4%)、Aランクは確保した。来年度以降、タンパク質含量の高位安定化に向けて更なる改良を行う予定。

4. 流通の改善・合理化

JAへ全量出荷しており、山口県で進めている地産・地消の取組の一環である、学校給食用パンの県産小麦使用率100%を目指した増産運動に寄与している。

5. 今後の麦作への取組み

連作による地力低下や?せた土地で低収量に対応するため、土づくりによる地力向上を目指していく。

現在行っているほ場毎の特性を把握した排水対策、肥培管理、雑草対策をより一層徹底することで、小麦生育のほ場間差を少なくし、基準値内のタンパク質含量を維持しつつも更なる収量向上を目指す。また、赤かび病防除及び開花期追肥を徹底し、安全で安定的な高品質小麦栽培を実施していく。

借り受けている中小規模のほ場について、地主との交渉で可能なものは大区画化していく等の効率化に努めていく。

効率的な栽培のためにICT技術については様々なシステム等の活用を検討しているところではあるが、入力作業等に多大な労力を要することから慎重な検討を行っているところ。

高品質な小麦栽培のため、必要な手間は省かないという大前提の下、収量の高位安定化、農機具の長寿命化、大区画化、ICT活用等で更なるコスト削減を図っていく。